

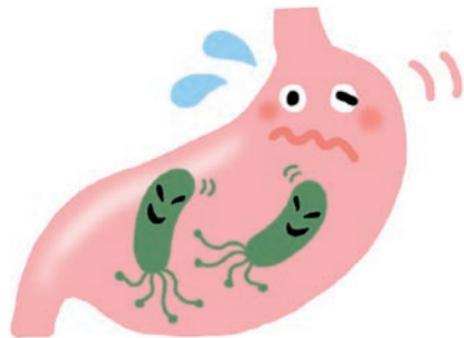


胃がんとピロリ菌の関係

胃がんの原因として、ピロリ菌が関係しているといわれています。ピロリ菌は胃の粘膜にすみ着く細菌です。ピロリ菌の感染が長期間持続すると、胃の粘膜が薄く痩せて萎縮が進行し、萎縮性胃炎となり、胃がんを引き起こしやすい状態になってしまいます。ピロリ菌に感染している人全員に、胃がんが発生するわけではありません。わが国でピロリ菌と胃がんとの関連性を調べた結果、10年間で胃がんの発生率は、ピロリ菌に感染していない人では0% (280人中0人) でしたが、ピロリ菌に感染している人では約3% (1,246人中36人) と報告されています。つまりピロリ菌に感染していると、胃がんのリスクが高くなります。

ピロリ菌に感染していたら？

ピロリ菌に感染している場合には、除菌することが勧められています。ピロリ菌を除菌すると萎縮が進行しなくなり、新たな胃がんの発生する確率を1/3に減らすことができたとの報告もあります。除菌には胃酸



を抑える薬と二種類の抗菌薬を用いる方法があり、除菌率は80～90%といわれています。薬を飲んだら除菌できたかの確認まで行ってください。

生活上の注意点

一般に、がんを予防するためには食事に注意することも大切です。ピロリ菌に感染している人で萎縮性胃炎と診断されている人について、塩分摂取量が多い人ほど胃がんの発生が多いという報告もあります。ピロリ菌に感染していることが分かったら、まずピロリ菌を除菌し、塩分を控え、野菜を多く取って胃がんを予防しましょう。